特集趣旨

アジア女性史研究に寄与した大越愛子さん

「女性・戦争・人権」学会は1997年に発足し、私はその少し後、大越愛子さんに直接呼びかけていただいて入会した。「これまでの男性中心の歴史が封じ込めてきた「女性に対する暴力」の究明を通して、支配・従属の権力構造を明らかにしていきたい」という設立の目的はもちろんだが、何よりも、「慰安婦」問題がクローズアップされていた当時、実践的に問題に取り組もうとする大越さんの姿勢に賛同し、迷いなく仲間に入れていただいた。

大越さんのアカデミックな専門は哲学であり、自分は歴史学の専門家でないとしばしば言われた。が、『フェミニズム入門』（筑摩書房、1996年）のようにフェミニズムの歴史を叙述する女性史的な著作もあった。同書は当時から今日まで私が学生によく勧めている名著である。そんな大越さんがあえて歴史学の専門家ではない、と強調していたのは、歴史修正主義がはびこってアジアの女性たちが体験した暴力の歴史が歪曲され抹消されてしまうことへの危惧、歴史の改ざんに反対する明確な意思の表現でもあったことと思う。

大越さんは歴史研究者である鈴木裕子さんを厚く信頼された。日本のフェミニストの戦争協力を歴史的に検証する鈴木さんの仕事に対して、世間には「告発史観」といった揶揄や反発を向ける人もいた。しかし大越さんは、侵略戦争協力という「大日本帝国のフェミニズム」の過誤を、たんに専門家が占有していればいい過去の話と見るのではなく、今を生きる実践的フェミニストとして主体的に引き受け、その克服を志す姿勢があざやかであった。鈴木さんとタッグを組んでジェンダー視点で見る日韓歴史共同教材作成に尽力され、金子文子や長谷川テルのような、植民地化された朝鮮や侵略を受ける中国のひとびとの側に身を寄せて闘った女性たちの存在を重視された。

そんな大越さんの姿勢がよく表れている資料として、『日本女性運動資料集成』全10巻が刊行された折に『図書新聞』に掲載された、大越さんと私の対談や鈴木さんが刊行に寄せて書かれた文章を紹介する。

2003年にミリアム・シルバーバーグさんに招かれて大越さんと北原恵さんといっしょに渡米したこと、アジア現代女性史研究会を発足させて最初の取り組みになった2004年5月の長野県での合宿、12月に来阪したミリアムさんと吹田で再会したときのこと、韓国の淑明大学からゲストを迎えて大越さんも駆けつけてくれたこと、など、楽しかった思い出は尽きない。そんな大越さんの存在に励まされて、アジア現代女性史研究会を発足させ、活動を続けてくることができた。大越さん、ありがとうございました。

藤目ゆき